



THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 2

学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく
国際社会を生きぬく児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

2022(令和4)年

月1日発行

ロンドン日本人学校
令和3年度 第10号

AI時代の進路を拓く「学力」とは(その3)

校長 石山 秀樹

掲載した問題は、「令和3年度全国学力学習状況調査(以下、全学調) 中学校第3学年 国語」からの抜粋です。学校だよりでは毎年、全学調の問題を取り上げ、その中から「求められる学力」について考察してきました。

今回、中3国語の問題は大問4つとも見た目はオーソドックスです。以下に掲載した大問3も、有名な夏目漱石の作品「吾輩は猫である」を題材としています。ここで私が注目しているのは問四です。猫である「吾輩」が、作中の相手方である「黒」についてどう捉えているか読み取って表現し、さらに「解答者自身の考え」を問うています。実は今回、他の大問にもそれぞれ、何らかの制限を設けながら「解答者自身の考え」を問う設問があります。私はここが鍵だと感じました。

一方、今年度実施される予定であった、「OECD生徒の学習到達度調査(以下、PISA)」は、コロナ禍のために延期となり、2022年度に延期される予定です。PISA2018については以前の学校だよりも触れたところですが、「日本の読解力が下がった」とセンセーショナルに報道され、私は「もう少しPISA2018の結果についてしっかりと『読解』すべきではないか」と感じたことを覚えています。

PISA調査は、学校で学んだ内容の定着を測る内容ではなく、義務教育終了段階の生徒の知識・技能が、実生活の場面でどれだけ活用されるかを見る内容になっています。日本では一般に「読解力」というと、国語の文学作品の読み取りのように「文章を読み取り、理解する能力」とされます。しかし、PISAでの「読解力」の定義は、「自らの目標を達成し、知識と可能性を伸ばし、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解、活用、評価、反映、関与すること」とされているのです。

さらに加えて、近年のICTの進展を受け、PISAのテストはPCを使い、オンライン上の様々な図表を含めたテキストを照会し、吟味、考察する形式にもなっていることが特徴です。定義にあると

おり、実社会との繋がりを意識した形であることが明確になっています。

日本の全学調とOECDのPISAに共通するのは、「情報を読み解くだけでなく、自分として確からしい根拠を元に意見をもち、表明すること」が求められている点です。かつての日本の教育では「正答主義」が幅を利かせ、教科書に載っている、或いは先生の頭の中にある「正解」を早く掴んだ者が「能力がある」とされてきました。しかし、これからの「学力」の指針の一つでもある全学調やPISAが示す価値は、そうではありません。提示される問題の答えはある意味ではオープンエンドであり、「あなたはどのように情報を掴んだか」「そのことについてどのように考えたのか」「なぜそのように考えたのか」を自分が表現することに価値があるとされているのです。

このような学力をつけるためにどうするか。1つには、情報をきちんと把握するために、言語を自在に操れるようにすることです。情報の伝達の多くや思考は、言語を介して行われます。国語や英語の学習、文章を書くこと、読書の習慣等はこれにあたります。2つ目には、自分が接した「問題」について、根拠を踏まえた意見をもつ(「私は～と考えます。なぜなら…」)ように習慣化することです。これは、学校では国語や英語に限らずあらゆる授業、授業以外の学級活動や生徒会・児童会活動等々、どのような教育活動でも、また、御家庭でも子供への問いかけを工夫するだけで実践できるでしょう。

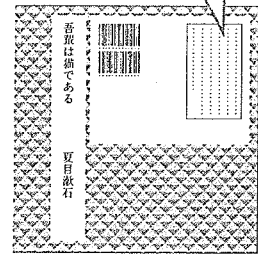
なお学校では、教育活動でこれらを習慣化するのみで終わらず、子供のそうした取組を評価しフィードバックしていくことが必要となります。現在、小学部の「単元テスト」や中学部の定期テストでは、全学調のようなオープンエンドの答えが要求される問題は多くはありません。「〇つけ」が難しいこのような内容を、どのように指導や評価に取り入れていくか、私は、学校や教師の腕の見せどころだと考えています。

次は、夏目漱石の作品『吾輩は猫である』の本のカバーに書かれている「紹介」と、「文章の一部」です。これらを読んで、あの問いに答えなさい。

【紹介】

中学教師の苦沙弥先生の家で暮らす猫「吾輩」から見れば、世の中は全くもって滑稽そのもの。周囲の様子を観察し、様々に評価する。ユーモアあふれる長編小説である本作は、漱石が三十八歳のときに発表して以来、多くの読者に愛されてきた。今なお、多くの人の共感を呼ぶ名作。

【文章の一部】



「(ここまでのあらすじ) 苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶臼で黒猫の「黒」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋(人力車を引く人)に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶臼の中で寝ころびながら、いろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそくにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。
「おめえはいままでに鼠を何びきとったことがある。」
吾輩は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇氣とにいたってはとうい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したときは、さすがにきまりがよくはななかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はどうとうと思つて、まだとらない」と答えた。
黒は、彼の鼻の先からびんとつばつて長い長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにとどこ足りないところがあつて、彼の氣焔を感じたようにこのころ鳴らして謹聴していれば、はなはだ御しやうい猫である。吾輩は彼と近づきになつてからすぐにこの呼吸をのみこんだから、この場合にも、なまじいおれを弁護してまずまず形勢を悪くするの愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいぶんつたろう」と、そそのかして見た。
果敢彼は、塙壁の欠所に唸鳴して来た。

「たんとでもねえが、三、四十はとつたろう」とは、得意気なる彼の答へであつた。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かつて、ひどい目にあつた。」
「へえ、なるほど」と、あいつづをうつ。
黒は大きな眼をばちつかせて、いう。

「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って緑の下へはいこんだら、おめえ、大きな私たちの野郎がめんくらつて飛びだしたと思ひねえ。」
「ふん」と感心して見せる。

「いたちつてけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしよつて気で追つかけて、とうとうどぶへ追いこんだと思ひねえ。」
「うまくやつたね」と喝采してやる。
「ところがおめえ、いざつてえ段になると、やつめ最後つ尻をこきやがつた。くせえのくさくねえのつて、それからつえものはいちちを見たと胸が悪くならあ。」
彼はここにいたつて、あたかも去年の臭氣を今なお感ずることく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。鼠も少々臭のどくな感じがする。ちつと景氣をつけてやろうと思つて、

「しかし鼠なら、君ににらまれては百年目だろ。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにとつて色つやがいのだろ。」
黒のこきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも反対の結果を呈出した。彼は喝采として大息していう。
「考げえるとつたらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——いってえ人間ほどつてえやつは世の中にいねえ。人のどつ鼠をみんな取りあげやがつて、交番へ持つてゆきあがる。交番じゃ、だれがとつたかわからねえから、そのたんびに五つづくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありやしねえ。おい、人間でものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこつたようすで背中の毛を逆だてている。吾輩少々氣味が悪くなったから、いかげんにその場をこまかして、うちへ帰つた。
このときから吾輩は、けつして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になつて鼠以外のごちそうをあさつてあつてもしなかつた。ごちそうを食うよりも獲っていたほうが氣楽でいい。

夏目漱石『吾輩は猫である』(上)による

一 線部①「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つなさい。

- 1 コツをつかんだ。 3 ため息を抑えた。
- 2 息を吸い込んだ。 4 発言を我慢した。

二 線部A「喝采してやる」、線部B「とつた」のそれぞれについて、「吾輩」の動作である場合は1、「黒」の動作である場合は2、「亭主」の動作である場合は3を選びなさい。

三 線部②「反対の結果を呈出した」とありますが、このことは「黒」のどのような様子から分かりますか。「文章の一部」の中から探し、抜き出しなさい。

四 「紹介」に線部「様々に評価する」とありますが、「文章の一部」では、「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのよう接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の条件1と条件2にしたがつてなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 「文章の一部」から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書くこと。

条件2 条件1のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。